

「内科医の薬 100 Minimum Requirement」第 2 版

東京都済生会中央病院副院長 北原 光夫 編集
慶應がんセンター顧問 上野 文昭

市立舞鶴市民病院副院長

松 村 理 司

地域病院で一般内科の診療と教育に明け暮れている筆者にとっては、
実地臨床にびたりと役立つ本や雑誌を繙く時間は至福と言える。ところが、この種の“よい本”には最近でもなかなかお目にかかれない。医学書や雑誌の出版量自体は年々増えているように見えるのに、である。診断(特に画像診断)に関する“よい本”はまだしも存在する。しかし、治療に関する“よい本”となるととんと少なくなるのだ。薬に関する“よい本”も例外ではない。例えば肺炎の抗生剤選択について、“感受性のあるものを適当量”とか“A または B または C または D または…”としか書かれてない本は、“よい本”とは言えない。

この本は“よい本”だ。“よい薬”についてのとても“よい本”だ。内科の

“よい薬”を 100 種類に絞り込んだコンセプトのすばらしさは、この第 2 版でももちろん継承されている。4 年半の間の“進歩”は汲まれているが、いたずらに“新しい薬”に移りしているわけではない。文字どおり自家薬籠中の“よい薬”ばかりが取り上げられているのは、秀でた臨床医ならではのセンスである。今回も編集に当たられた北原光夫・上野文昭両先生の見識と指導力の賜物でもあらう。

執筆者による個性の違いも感じられるが、全体に読みやすくまとめられている。薬物相互作用や副作用もかなり詳しい。同種薬剤への言及も説得的だ。保険適用外の指摘も親切だ。必要に迫られて項目ごとに読んでも教えられるところが多いが、週末に丸ごと通読するのも、内科医の

生涯教育としてうってつけだ。

筆者の勤務する病院の内科系研修医は、幸か不幸か、“よい本”の取捨選択には生意気なほどに厳しい。米国から招いている優れた臨床指導医の影響が大きく手伝っているのだろう。その彼らの白衣のポケットの多くにこのハンディーな本が見かけられる姿は、頼もしい。

同一出版社から依頼された書評では、できるだけ“よいしょ”しないように心がけているつもりなのに、反対の結果になってしまった。“よい本”だからだ。ますます洛陽の紙価を高めてほしい。

● B 6 頁 254 図 1 表 22 1998
定価(本体 3,800 円+税) 円 400

医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)